

毎月一回20日発行 1988年9月10日発行増刊号(通巻35号)

(1988年6月18日第三種郵便物認可)

月刊トマホーク通信

増刊号
88.9.10
定価 100円

〒150 東京都渋谷区渋谷Z-5-9 パル青山502 トマホーク社 ☎03(498)6095
044(63)5101

緊急増刊

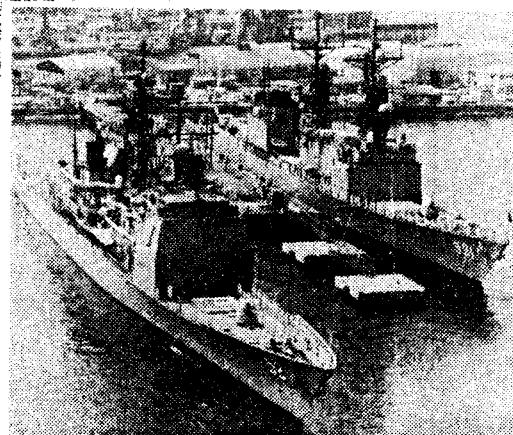
ファイフ、バンカーヒル

横須賀入港

●「母港化」とソウル五輪



その朝、横須賀の海には約20隻の抗議船が出た。中でも活躍したのが「平和船団」の3隻のゴムボート。灰色の鉄の塊の前で、それはずいぶんと大きく、頬もしく見えた。



トマホークの配備を許さない！全国運動

●維持会員（月間会費）

団体 1日 2000円
個人 1日 1000円

●参加会員（月間会費）

団体 1日 1000円
個人 1日 1500円

●通信会員

年間 2000円

会費は本誌購読料を含みます

あなたも仲間に！



怒り、無念さ、そして希望…

ドキュメント '88 なつ

州にあるチャイナレイク海軍へいきセンターの模擬目標に到達した。英國の軍事専門誌「ジーン・ディフェンス・ウイークリー」の八月二十日号が米国防省の統合巡航ミサイルプロジェクト本部の発表として伝えたもの（八月三十一日「神奈川」）。射程距離が対地通常型よりも大きいことから核弾頭型の訓練弾だった可能性が濃厚である。

●八月十五日

「県民運動」知事との面会を求めて県庁前で座り込みを始める。横須賀では「市民の会」が九項目にわたる公開質問状を市長に提出。「非核市民宣言運動ヨコスカ」は毎日デモを開始。

●八月十六日

長洲神奈川県知事、記者会見で「事前協議がないから非核三原則が守られているという説明では県民の不安は解消できない」「今までより一步踏込んだ対応を検討している」と表明。

●八月十八日

「県民運動」は十七日に座り込みを解き、この日副知事と面会。核の有無についての「神奈川判断」を求めた。

二隻ハワイを出港。

母港化反対 6割超す

市民グループがアンケート

横須賀

「市長は拒否を」56% 「守られていない」58% 「非核3原則」3%

●八月二十一日

米軍極東放送網(FEN)のニュースが「ファイフとバンカーヒルがやがてこの夏に横須賀に配備される」と放送。八月入港の前に触れ。

●七月十九日

「核トマホーク艦の横須賀母港に反対する市民の会」（世話人・齊藤淑子さんら七人：以下『市民の会』と略）が十三万七千人分の署名を横山横須賀市長に提出、同時に四十人以上の市民が出席して市長との直接交渉を行う。市長は「安保を認めする立場から母港反対とは言えない」。

●八月九日

長崎市の本島等市長、「平和宣言」を発する。「非核三原則が国はとなつて二十年、その空洞化は最早許されない時にきた。アメリカの艦船の寄港に對して、日本政府は主張を持って核兵器の有無を検証し、非核三原則を厳しく守る立場を鮮明にするべきである」

●八月十日

ファイフが南カリフォルニア沖で垂直発射装置(VLS)から対地攻撃用トマホークの訓練弾一発を発射した。ミサイルは千四百三十六キロを飛んで、予定通りカリフォルニア

●八月二十一日

「横須賀をトマホーク艦の母港にさせない県民運動」（田村清代表：以下『県民運動』と略）が県知事に九万五千人分の署名を提出、「母港反対」の意思表示を求めた。県知事は「気持ちは皆さんと同じだ。今、対応を検討している」と答えた。

●八月二日

「横須賀をトマホーク艦の母港にさせない県民運動」（田村清代表：以下『県民運動』と略）が県知事に九万五千人分の署名を提出、「母港反対」の意思表示を求めた。県知事は「気持ちは皆さんと同じだ。今、対応を検討している」と答えた。

●八月二十四日

海上自衛隊の潜水艦「なだしお」が遊漁船「第一富士丸」と衝突、三十人が犠牲に。自衛隊の命軽視とともに超過密の東京湾の危険性があらためて浮きぼりとなる。

8月25日「神奈川」

●八月十九日

広島の「ピーススピリット88実行委員会」一万二千余人分の署名を県知事に提出。「母港化すれば呉への入港も必至です。被爆地の自治体として母港化に反対を」。

NHKニュースが「両艦の入港は八月三十一日」と報道。

●八月二十一日

横須賀で母港化反対の市民デモ。約百人が参加。「市民の会」は市内七カ所で市民六百二人を対象としたアンケート調査。「母港化反対」が六〇・八%、「賛成」はわずか一・四%。(詳しくはスクラップを)。広島では原爆ドーム前と呉市内で座り込み。

●八月二十二日

「反トマ首都闘運動」、東京・銀座通りでデモ。在日米海軍当局、ファイフとバンカーヒルが八月三十一日横須賀に入港すると発表。

●八月二十六日

「反トマ首都闘運動」、東京・銀座通りでデモ。在日米海軍当局、ファイフとバンカーヒルが八月三十一日横須賀に入港すると発表。

●八月二十八日

ヨコスカ市民グループの定例デモ。ダーリン前での英語のスピーチ、シユプレヒコールに力が入る。

●八月二十九日

長洲神奈川県知事はマンスフィールド大使と会見、「入港を中止または延期してほしい」「入港する場合には核がないことを示してほしい」と要請したが、大使は「入港の中止、延期は難しい。非核三原則は尊重するが特定の場所に核があるのかないのかを明らかにしないのが米国の方針だ」と答えた。知事は続いて宇野外務大臣にも「非核の裏付け」を求めたが「事前協議がない」とはねかえされた。一方、横山横須賀市長も外務大臣に要請したが答えは同じ。安保条約にもとづく随時協議をとの申し入れも拒否。外務大臣は言った「非核三原則は守られている。私を信頼してくれ」。

「反トマホーク全国運動」も梅林代表と京都の吉田満智子さん(吉田さんは二十一日以来神奈川に滞在し運動に参加していた)が外務省に非核の明確化とそれが得られない場合には母港化を拒否するよう要請。応対に出た猪俣課長補佐「政府は国民によく説明している。理解が得られないのは国民が悪い。政策を変えるつもりはない」。この日までに外務省にとどいた母港化拒否を求めるハガキは三二一五通であることを確認。

●八月三十日

横須賀市議会「トマホーク艦二隻の入港見合せ」を政府に求める意見書を全会一致で採択。長洲県知事は記者会見で政府の態度への不満を表明。

●八月二十七日

「市民の会」が市長と直接交渉。十五日に提出した公開質問状への回答を求める。市長は直接外務省に出向き市民から十三万以上の署名が寄せられていることを伝える。核兵器の持ち込みが絶対に無いことを、今までより明確に明らかにするように求める、としながらも入港そのものを拒否することは出来ない、これまでの姿勢を崩さなかつた。「市民の会」は入港拒否を求めて市庁舎前での座り込みに入る。

神奈川県と横須賀市からの事実確認に対し、外務省は「垂直発射装置の装備は確認している。事前協議がない以上、核の持ち込みに対する疑いはもっておらず、改めて確認する必要はない」と回答した。

「市民の会」は横須賀市議会に請願書を提出した。



「ゴムボートあります。使って下さい、場所と時間を指定してくれれば持っていきます」ヨコスカの仲間にこんな手紙が届いた。人々の確かな思いに支えられて「平和船団」は海に出た。

その一方で、ますますやりにくくなってきたのが、チャーター船での抗議行動。そもそも船不足、その筋からの横槍などで2隻確保がやっと。カンパをくれた人ありがとう。でも残念。港まで来て、乗れなかった人、ごめんなさい。この顛末は次号で…。

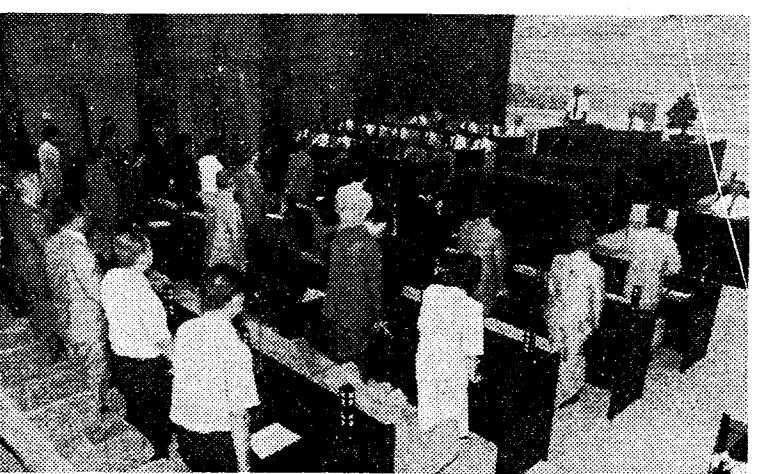
佐世保市の熊獅市長、外務大臣に申入れ書を提出。「両艦は今後佐世保への出入港が予想される」「非核三原則の空洞化を恐れる市民の疑義を解消する必要がある」として非核三原則の堅持を米国に申し入れ、政府も守られていることを明らかにするよう求めた内容。これは現地の「核艦船寄港阻止現地闘争本部」からの申し入れ(二十六日)に答える形で行われたもの。これまで非核都市宣言などについても「非核三原則を順守することの大丈夫」と強調してきた同市長の姿勢からすれば極めて異例のことである。

横須賀では夜、県評などでつくる「現地闘争本部」主催の集会とデモ。市民も多数参加。夜七時には横須賀中央駅前で「非核市民宣言運動ヨコスカ」の呼びかけで徹夜の座り込みが始まった。

朝六時半、ヨコスカ平和船団が行動開始。三隻のゴムボートが臨海公園を出発、二隻の接岸するバース付近に何時でも来いと陣取る。近くの海岸からはモーターボート二隻、そしてヨット一隻。横浜からは「県民運動」のチャーター船二隻が横須賀に向かう。モーター

ボートは残念ながら故障で引き返さざるを得なかつた。ヨットも風(がないこと)に泣かされた。ゴムボートは威力を最高に發揮。二隻に数十メートルの距離まで肉薄し抗議の意思表示。チャーター船はファイフには間に合わなかつたがバンカーヒルを迎え撃つ形で兵士へのアピール、シユプレヒコールを繰り返した。これらを含めて当日の抗議船は約二十隻。抗議船の倍以上の警備艇に守られて、ファイフは八時四十五分、バンカーヒルは九時四十五分に接岸。あつけない「母港化」の瞬間。

陸上では「現地闘争本部」が浦賀水道をのぞむ観音崎で抗議行動。正午から「市民の会」立つ約二百人の参加。デモの解散後は市庁舎での座り込みに合流した。夜には基地ゲート前に集り、基地司令官に抗議文を届けた。



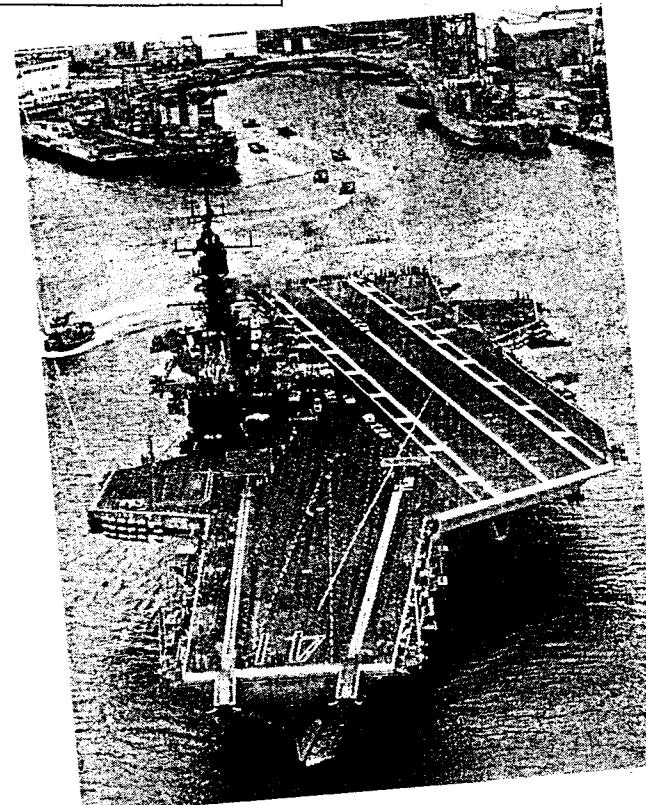
総員起立で意見書を採択した横須賀市議会

八月二十二日から二十八日にかけて、ソウルで「韓半島の平和と統一のための世界大会および汎民族大会」が開かれた。反戦、反核、統一を公然と掲げたこのような会議は歴史上はじめてのこと。主催者には昨年六月以来の民主化闘争をリードした主要な在野勢力の人々が顔をそろえている。「反トマ運動」の梅林宏道さんも日本からの代表団の一人として参加した。熱気と感動に満ちた会議のレポートは次号以降に。

韓国 史上初の反戦反核国際会議

オリンピック「警護」に向つ!! シドウェイ

ファイフ、バンカーヒルも間もなく



九月八日、空母ミッドウェイが駆逐艦オルデンドルフを伴って横須賀を出港していった。行先は日本海。ソウル・オリンピック「警護」の作戦行動のためだ。オリンピック期間中、米国は二個空母機動部隊を日本海に派遣し、海上自衛隊との共同演習も予定されている。ファイフとバンカーヒルも間もなくそれに加わる。統一と平和を願う朝鮮半島の人々の胸もとにトマホークを突き付ける、「母港化」のもう一つの素顔。

ソウル五輪と米日韓軍事作戦

韓柱玉 (アジア動向研究会)

米日韓一体の

軍事展開

「ソウル五輪安全」をめぐる軍事展開の一端を見よう。

▼五月ごろから韓国全域と北東アジアは全面的な臨戦体制に入った。

▼韓国軍の合同参謀会議議長・崔世昌大将は四月十四日ひそかに来日、日本の瓦防衛庁長官、石井統幕議長、寺島陸幕長らと協議した後、横田でデービス在日米軍司令官との協議をへて、沖縄に飛び、マルクイン米海兵司令官らと協議した。

▼米原子力空母エンタープライズ、カール・ビンソンが五月ごろから韓国海域（日本海）で韓国海軍との演習をくりかえしながら行動を開始し、七月一日と三日にはカール・ビンソンが航空自衛隊と共に訓練をおこなった。レンジャー、ミッドウェイも参加するとのこと。

▼トマホーク搭載の戦艦ニュージャージーが駆逐艦二隻とともに釜山に入港（七月三十一日）、さらに朝鮮西海岸（黄海）で韓国海軍との演習後仁川に入港（八月一日）した。戰

カール・ビンソンなど三個米空母戦闘団（三十隻、三百機）が朝鮮海峡にひしめき、陸上では、ブラックベレー（韓国軍特殊部隊）の特攻隊一万人を中心とする軍・警十二万人の警備団が競技場を取り巻き、上空にはF-16戦闘機が旋回するという、文字通り硝煙立ち込めるなかで、来る九月十七日、韓国のソウルでは第二十四回オリンピック大会が開かれるという。

その開会式を飾るメイン・アトラクションもまた、韓国軍のブラックベレー（特殊部隊）によるメイン・スタジアムへのパラショート下降で、いかにも「韓国的」である。

米による南北分断国家の一方でだけオリンピックを開くのは分断を固定化し、対立と緊張を激化させるという反対論を押し切り、この「平時における最大」の軍事行動はなぜか。

米による南北分断国家の一方でだけオリンピックを開くのは分断を固定化し、対立と緊張を激化させるという反対論を押し切り、米日韓の協力によってソウル五輪が決まった時、世論は「政治オリンピック」と称した。いま展開している軍事行動について米日韓側は「テロの防止」「オリンピックの安全」のためだという。そこで、改めて想起されるのが、あの、疑問と謎に包まれた「大韓航空機失踪事件」である。「北朝鮮側のテロ」を理由に、朝鮮民主主義人民共和国を「孤立化」し、韓国「優位」を形づくるための国際的謀略の一環ではなかつたか、という声である。

艦ミズーリも来援の予定。

▼韓国軍は「統一88」という挑発的な名称の演習を陸海空、とくには、ソウル五輪競技場の上空などでくりかえしている。

▼岩国市の海兵隊、航空・ヘリ部隊など六千人が韓国に移動し、四万八千にふくれあがつた駐韓米軍は米韓連合軍の指揮の下に(韓国軍もその作戦指揮下にある)臨戦体制に突入している(七月から)。

▼八月五日に日程を終えたリムパック(環太平洋合同演習)参加の原子力空母ニミッツがイージス艦など約十隻で特戦団を編成、ハイ・真珠湾で補給後、韓国海域に入った。ニミッツには韓国士官が同乗し、「視察」の名目で同乗していることが判明した。これは韓国モリムパックに参加しており、リムパックそのものが今回の「五輪支援・韓国海域作戦」に直結していることを示している。

▼八月十八日から沖縄の海兵隊と海・空の「防空・対地支援」統合演習と、同海兵航空隊と航空自衛隊の米日共同空中戦演習が沖縄一帯でおこなわれる。これは「ソウル五輪有事」を想定したもので、デービス在日米軍司令官は「必要ならば在日、在比米軍の派遣もありうる」と語っており、航空自衛隊西部方面隊の庄司令官は、自衛隊も臨戦体制に入っ

ていることを示唆している。

▼そしていよいよ、九月二十八日から一週間、日本の海上自衛隊も参加する。この「史

上空前規模」の演習には米軍との共同演習も含まれており、事実上の米日韓共同演習が日本海を主舞台に日本全域で展開される。参加兵力は三万。海自と空自の航空機二百機、潜水艦を含めて大湊から横須賀、佐世保まで全艦艇百七十隻が総動員され、海幕長が直接指揮をとるという。

▼時を同じくして、海上自衛隊の潜水艦隊は対馬海峡を含めた「海峡封鎖作戦」態勢を固めており、アジアで第二戦線が開かれる時の焦点は「朝鮮半島への上陸」だと報道されている。

ソウル五輪への「テロ」にこれだけの「史上最大」の軍事展開が必要だとか、「北朝鮮が戦争でソウル五輪を阻止する」と思う人はいないだろう。

では、この米日韓共同の軍事行動の狙いは何か? 「テロ防止」に名をかりた盧政権へのテコ入れ、民主化勢力及び北朝鮮への威嚇もさることながら、その真の狙いは、今後の駐韓米軍撤退に備えた米日韓軍事一体化にあり、その焦点は日本の役割の增大・確立にあると、いう指摘にこそ真実味があるのではないか。

■編集後記■

入港したらすぐに緊急レポートの増刊号を、と意気込んでいました。母港化をめぐつてし、だいに煮詰まっていく事態、とくに自治体を土俵にしたせめぎあいが、マスコミではどうしてもローカル・ニュース扱いで全国の皆さんに十分に伝わっていないのではと思つたからです。ところが、連日の行動でさすがに疲れて、発行予定が一週間近く遅れてしましました。おまけに中身も(韓桂玉さんの論文はもちろん別として)だいぶおざなりなものになってしまったなあ、と反省しきり。「増刊号」の価値はあるのかしらん。

予定の原稿をまたまた積み残してしまいましたが、次には必ず。(た)

月刊反トマホーク通信 増刊号

一九八八年九月一〇日発行

*発行 トマホークの配備を許すな全国運動
〒150 東京都渋谷区渋谷一丁目十九番

青山五〇二 トマホーク社

⑧〇三(四九八)六〇九五
⑨〇四(六三)五一〇一

*編集 反トマホーク通信編集委員会
*定価 一〇〇円(通信会員年間一〇〇〇円)